

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	パヴロス・ニルヴァナス『プシヒコの犯罪』：現代ギリシャ・ミステリの嚆矢と普通文学
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア, 28 : 25 - 34
Issue Date	2022-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053432
Right	Copyright (c) 2022 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



パヴロス・ニルヴァナス『プシヒコの犯罪』

——現代ギリシャ・ミステリの嚆矢と普通文学——

橘 孝司

國立臺中科技大學應用日語系 助理教授

1 現代ギリシャ・ミステリの嚆矢

今日、最初の現代ギリシャ・ミステリ長編とされているのは、作者不詳『シャーロック・ホームズ、ヴェニゼロス氏を救う』(*Ο Σέρλοκ Χολμς σώζων τον κ. Βενιζέλον*) である。1913年12月から1914年3月にかけて週刊誌 *Ελλάς* に掲載された連載読み物で、バルカン戦争の講和のためにロンドンを訪れたギリシャ人首相をバイカー街の高名な探偵がテロリストの脅威から守るという、通俗スリラー小説である。

雑誌掲載されて以降は埋もれていたのだが、作家フィリポス・フィリップが発掘し、百年後の2013年に *Αγρα* 社から出版された。

それ以前という、ギリシャ最初のミステリと言われていたのはパヴロス・ニルヴァナスによる『プシヒコの犯罪』(*Το έγκλημα του Ψυχικού*) だった (こちらは週刊誌 *Θεατής* に1927年12月から28年4月まで連載されている)。例えば、フィリップは《ギリシャ・ミステリ作家クラブ》のホームページに投稿した文章中で次のように明言する。

「ミステリ風のプロットを持つ最初のギリシャ長編小説はニルヴァナスの『プシヒコの犯罪』だった」 (*Το πρώτο ελληνικό μυθιστόρημα με αστυνομική πλοκή ήταν Το Έγκλημα του Ψυχικού του Παύλου Νιρβάνα (Φιλίππου)*)

通俗スリラー『シャーロック・ホームズ、ヴェニゼロス氏を救う』に対し、『プシヒコの犯罪』は新アテネ派の純文学作家による作品であり、そもそも方向性が異なっていると思われるので、どちらが最初の実探作品なのかという先陣争いはあまり意味をなさない。それよりも、ニルヴァナスがどのような狙いでこの作品を書いたのかを探るほうが意味があるだろう。

本稿は、この点について少し考えてみたい。

2 問題点

問題点は「なぜ1920年代という時期にギリシャ最初の実探小説『プシヒコの犯罪』が誕生したのか」ということである。ここには多くの疑問が含まれているので、次の三つの部分に分けて考えることにしたい。

- A) なぜこの作品が長編（αστυνομικό μυθιστόρημα）とされるのか？
- B) 作家はどのような狙いで書いたのか？
- C) 作家にとって例外的な作品なのか？

3 作家のプロフィール

まず作家のプロフィールを簡単に述べておく。

パヴロス・ニルヴァナス（Παύλος Νιρβάνας 1866-1937、本名 Πέτρος Αποστολίδης）は黒海北岸マリウポリの出身である。幼いころにピレアスへ引越している。

アテネ大学で医学を学び、王立海軍軍医、海軍省最高法医学評議会会長として活躍、1923年にギリシャ心理学研究会を設立した一人でもある。

1922年に退職後、新聞記事や作品の執筆に専心する。ただし文学への志向は若いころから芽生えており、最初の詩集出版は18歳の時だった。

詩人コスティス・パラマスの、いわゆる「新アテネ派」に属し、カルカヴィツァスやクセノプロスとほぼ同世代である。耽美主義や象徴主義、イプセン、ニーチェの影響を受けていると言われる。詩や戯曲も残しているが、「新アテネ派」に特徴的な村や町の風俗小説（ηθογραφία）を多く手掛け、登場人物の心理を深く洞察した描写が特徴的である。ただし本領は批評や新聞の時事エッセイ（χρονογράφημα）ともされる（Γιάκος, p. 539）。

最初純正語で書いていたが、のちに民衆語に転じた。この点でカルカヴィツァスに通じるものがある（カルカヴィツァスも軍医だった）。

代表的な小説としては、以下が挙げられる。

『真珠と羊飼いの娘』(1914) *Η Βοσκοπούλα με τα μαργαριτάρια* (短編集)

『パルセニス神父伝』(1915) *Το συναξάρι του παπα-Παρθένη* (短編集)

『神の通過』(1922) *Το πέρασμα του Θεού* (短編集)

『野の花』(1924) *Το αγριολούλουδο* (長編)

『プシヒコの犯罪』(1928) *Το έγκλημα του Ψυχικού* (長編)

つまり、『プシヒコの犯罪』は62歳で発表された最後期の作品である。

4 作品の構造

まず、問題点 A)「なぜこの作品がミステリ小説とされるのか？」についてみていきたい。誤解のないように言っておくと、この作品がはたしてミステリと言えるのかという表面的な分類の問題ではなく、どのような特徴ゆえにフィリップたちがミステリの文脈に取り込もうとするのだろうか、という点を確認しようとするものである。

ミステリが描く出来事を時間的展開にしたがって並べるならば、大雑把には次のようになるだろう。どの段階を小説内で描くかによって、パズラー型になったり、クライムストーリーになったり、あるいは法廷ものが生まれたりする。もちろん小説内では通常、時間軸に沿って進んでいくのではなく、巧みなモンタージュが使われることで謎とサスペンスが生まれる。典型的なミステリ作品として大事なのは、犯罪や捜査の過程で「謎」と「推理」が存在することであろう。

発端⇒犯罪⇒捜査⇒解決⇒逮捕⇒拘留⇒尋問⇒裁判

『プシヒコの犯罪』のプロットをこの時間軸と並行させながら見ていこう。

冒頭でまず犯罪が描かれる。191*年 8 月にアテネ北のプシヒコ地区で身元不明の女性の刺殺死体が発見され、各新聞が煽情的に報道する。犯人を求めて憲兵隊(χωροφυλακή)の捜査が始まる。

特異なのはここからの展開である。主人公ニコス・モロハンス(Νίκος Μολοχάνθης)はさる島の出身でアテネ大の医学部に入ったものの、血が大の苦手で勉学を諦めてしまう。が、裕福な実家の援助によりその後も高等遊民としてホテル暮らしを続け、恋愛ごとや映画・大衆小説にのめりこんでいく。しかし、そのせいで現実とフィクションの境界があいまいになっていき、自分がど

ちら側の人間なのか、分明ならざるところに達する。同時に、虚栄心に溢れる若者らしく、世間を驚かせたいという野望も持ち続けている。

そんな折件くたんのプシヒコ殺人事件が起こり、探偵気分^{探偵気分}で報道に注目していたが、やがて自分が犯人であれば世間の注目が浴びられるはずだという妄想を抱き、あろうことか、犯人になり代わる決意をする。妹とその恋人を無理やり引き込み、密告書を書かせて逮捕される。

その後、拘留された陰惨な獄舎の様子や同房囚のあくどさが仔細に描かれ、並行して、事件をネタにして噂話に余念がない上流階級や裕福な娘たちなども登場する。

かくして裁判が始まるが、やる気のない弁護士や仲間の裏切りで圧倒的に不利となる。自らの愚かなふるまいのせいとはいえ、ニコスは死刑を免れるのだろうか、というのが主軸となってストーリーは進んでいく。

このように、発端から裁判まで典型的なミステリ小説のフォーマットを使いながら作品は構成されている。この点が、ミステリ風味溢れる作品に分類される理由のようである。

ただし、ミステリに特有の「謎」や「推理」の物語ではない。ニコスが真犯人でないことははっきり語られているし、官憲に逮捕されるのも協力者の密告による。その後真犯人を見つけ出そうとする過程にも、証拠をみつけだし推理を進めるという要素は見られない。

編者ランゴスも「探偵が不在で、真相の発見が偶然」（Ράγκος, 2006:14）と指摘しているし、そのゆえにフィリップも「最初のギリシャ・ミステリ長編小説」ではなく、「ミステリ風のプロットを持つ最初のギリシャ長編小説」と慎重な言い回しをしているのだろう。

5 作品の狙い

5.1 悲喜劇の笑い

『プシヒコの犯罪』は 1926 年にアテネで起きた現実の事件にヒントを得たらしい（Φιλίππου, p. 27）。それでは、問題点 B）、すなわち、この実際の事件を文学作品に仕立てあげた作者の狙いはどこにあるのだろうか。ミステリ風のこの物語は読者にいったいどのような効果を与えるのか。

作品を一読すると、ある種の笑いが全体をつつんでいるという強烈な印象を受ける。批評家も、本作は「風刺小説」（σατιρικό μυθιστόρημα, Τέλλος Άγρας <Γιάκος, p. 538 の引用>）であり、「愚かで虚栄心に満ちた若者が風刺されてい

る」(Στο «Το έγκλημα του Ψυχικού» σατιρίζεται ο ανόητος και ματαιόδοξος νέος, Γιάκος, p. 539) とする。一方でミステリ作家にとっては、「ミステリ・ジャンルのパロディ」(μια παρωδία του είδους, Φιλίππου) ということになる。

風刺にしるパロディにしる、笑いを引き起こすことに主眼があるはずだが、本作はどのような点が笑いを呼ぶのか、まとめてみよう。

まず、ささやかな笑いの仕掛けとして、語り手(作品全体は三人称語り)や登場人物による、揶揄をこめたコメントがある。

例えば、煽情的な報道ばかりを狙う新聞に対して、同じ犠牲者が「顔に痘痕がある」かつ「美貌の女性」であるとか、「古い擦り切れた靴を履いていた」と同時に「裕福な貴族の家庭の娘」であるのはひどい矛盾じゃないか、と語り手は茶々を入れる。あるいは、新聞報道を追うホテルのボーイは「『警察は追跡中』『逮捕間近』、これって迷宮入りということですよ」と皮肉る。

しかしながら、これらは局所的な失笑を引き起こす軽いジャブに過ぎない。

それよりも、作品全体を風刺あるいはパロディーたらしめている大仕掛けの装置がある。それは主人公の心理と行為そのものであり、出来事の前想外の展開である。

上で述べた荒筋から明らかなとおり、そもそもニコスの心理は尋常ではない。日頃から映画・大衆小説の世界にどっぷり浸かり、「自分が映画の影なのか、生きている人間なのか、区別がつかない」(本稿末の引用①)はまだしも、現実の殺人事件が起きると自分が真犯人であると夢想し、陰惨な犯罪を思い描いては自ら震え上がる(引用②)。街路で憲兵を見かけるたびに疑われていると恐れ、ついには逮捕されてもいい、そのみがか不安からの救いだという奇妙な諦観に至る(引用③)。妄想の中で人生の坂道を転げ落ちるだけではない。愚かにも現実に周囲を巻き込み、密告によって自分が逮捕されるよう画策する。世間の脚光を帯びることで、虚栄心を満たすことにもなる。フィクションの世界に住みながら立てた計画なので、いざとなったら脱獄すればいいさ、などと高をくくっている。

このようなニコスの愚かさ、執着、虚栄心を作家は距離を置いて冷静に観察し、描き上げていく。同時に、ニコスの意図とは別方向に出来事は展開していく。当然脱獄など簡単にできるはずもなく、世間知らずのニコスは様々な裏切りにもあう。本人の意図と現実のおおきなズレ、というアイロニーもまた読者の失笑を誘う。

γελοιότητα (p.46), 「悲劇的^{Φάρσα}笑劇」 τραγική φάρσα (p. 104)と作中で揶揄している。

5.2 社会の諸相の描写

それともうひとつ、作家が力を注いでいると思われるのが当時の社会の諸相、さまざまな階層の風俗スケッチである。ニコス自身は比較的裕福な島の一族出身であるが、作家の筆はアテネ上流階級のサロンから、新聞社や記者、牢獄の看守、同房の囚人などに及ぶ。特徴的なのはいずれの階層に対しても距離において観察し、特にその薄情さ、軽薄さといった否定的な側面をリアルに暴いていることである。

上流階級のサロンでは、殺人事件について無責任な噂話が延々と続く。オスカー・ワイルドにのめりこんでいる裕福な政治家令嬢はファンクラブのノリで、若き犯罪者の支援に熱狂するが、飽きるのも早い。ただただ読者受けを狙う新聞社の記者たちも、初めは牢獄までインタビューに押しかけるが、ニュースの新鮮度が落ちた途端に背を向ける。社会全体がお祭り騒ぎのように「犯罪者と目される人物への共感をヒステリックに表明する方向へ引きずられる」(παρασύρεται σε υστερικές εκδηλώσεις συμπάθειας για έναν υποτιθέμενο εγκληματία, Γιάκος, p. 539)。獄舎の中でも、看守は金にあざとく、他の囚人たちも気まぐれで気を許せない。

このように、作家の視線は異様な心理の主役だけにではなく、全方位的に、登場する社会の各層に向けられている。いずれに対しても安易な共感を抱かず、冷徹に観察することで、その愚かさ・滑稽味が浮かび上がり、失笑、冷笑を誘うことになる。

悲喜劇的の笑いと社会の諸相スケッチとは密に結びついている。

6 ニルヴァナス作品中の位置付け

最後に問題点 C) 「作家にとって例外的な作品なのか？」についてみておきたい。

国外でも A. A. ミルン『赤い館の秘密』やチャーホフ『狩場の悲劇』などのように普通文学の作家が例外的にミステリ作品を書いた場合が見られるが、『ブシニコの犯罪』も特殊な現象として突如現れたのだろうか。それとも、他のニルヴァナス作品と通底するなにかがあるのか。そうだとすれば、どのような点なのだろうか。

比較するために、1915年に刊行された初期の短編集『パルセニス神父伝——島の物語』(Το συναξάρι του παπα-Παρθένη κι άλλες νησιώτικες ιστορίες)を取り上げたい。以下のように、島と海にまつわる短編13篇が収められている。【 】内は簡単な内容メモである。

- 1 「パルセニス神父伝」 Το Συναξάρι του Παπα-Παρθένη 【やむなく船乗りをあきらめ神父になったが、海が忘れられない主人公】
- 2 「^{うたかた}泡沫の間で」 Στο αφρό της θάλασσας 【婚約者を待ち続ける娘の絶望】
- 3 「へべれけ」 Κρασοκατανόξις 【成就しなかったかつての恋】
- 4 「わが一族の復讐」 Το άχτι της γενιάς μου 【善良過ぎた祖父・父に代わる復讐】
- 5 「今こそ逝かしめ給え」 Νυν απολύοις 【突然老いを感じる自閉的な老船乗り】
- 6 「犬たち」 Τα σκυλιά 【犬に喧嘩を売る元船乗り。精神を病んだ理由】
- 7 「見よ、花婿来たる」 Ιδού, ο νυμφίος έρχεται ... 【花婿にあこがれ島を捨て都会に向かう老嬢の幻滅】
- 8 「ある死」 Ένας θάνατος 【逆恨みによる犯罪】
- 9 「トラコサリスじいさん」 Ο Τρακοσάρης 【高利貸しへの恨み。島の沈滞】
- 10 「ニコラキスの最期」 Το τέλος του Νικολάκη 【古語を偏愛する保守的な男】
- 11 「キジバトのように」 Σαν τα τρυγόνια 【老人の死で始まるミステリ風物語】
- 12 「小天使」 Αγγελικούλα 【故人を偲んで歌う飲み仲間たち】
- 13 「夫婦」 Αντρίγονο 【船を愛し夫婦のように思う船長。老船との別れ】

この中で『プシヒコの犯罪』同様に、犯罪を扱った作品は4「わが一族の復讐」、8「ある死」 Ένας θάνατος、11「キジバトのように」 Σαν τα τρυγόνια の三篇に過ぎない。「わが一族の復讐」はすでに逮捕され収監中の人物に語り手が面会に行くシーンで始まり、「ある死」も冒頭で白昼堂々の襲撃事件が起きる。両作品とも加害者・被害者ははっきりしており、なぜ犯罪が起きたのかという背景を語るのが興味の中心となる。「キジバトのように」は港湾に漂う老人の溺死体という、ミステリを思わせる出だしたが、身元が判明し周辺が捜査されても犯罪動機が見当たらず、事故として処理される。直前に老人と話した証人がある推測を語るが、真相かどうか判明しないままに終わる。

前二作では「なぜやったか？」という犯行動機を通じて、犯人の、激情・嫉妬・孤立化といった、周囲とは相いれない人間像が描かれる。「キジバトのよ

うに」はそもそも老人の死が犯罪か、自殺か、事故かで揺れ動くが、老妻を亡くした主人公の孤独な生活がストーリーの眼目となる。

人物の極端な執着心が悲劇につながるという展開は、他の作品にもみられる。

2 「泡沫の間^{うたかた}」では、周囲の噂にもめげず婚約者を待ち続ける娘が絶望し哀れな結末を迎える。6 「犬たち」はちょっとトリッキーな題名で、実は日々犬に喧嘩を売る奇態な元船乗りの話。その狂的な行為の裏の悲惨な理由が徐々に明かされる。聖者伝を思わせる題名の 1 「パルセニス神父伝」は、船乗りにあこがれていた人物がやむなく神父になったものの海が忘れられず、最後はとんでもない行為に出る。5 「今こそ逝かしめ給え」は周囲のとの交際を断ち《幽霊》と呼ばれる元船乗りが突然老いを感じ、7 「見よ、花婿来たる」では花婿にあこがれる島の老嬢が一大決心をして都会に出たものの、結局幻滅する悲惨な様が描かれる。

このようにみると、作品中で犯罪が扱われているかどうか、人の死が現れるかどうかにはかかわりなく、作家が焦点を当てるのは、なにかに執着する人物、それも多くの場合過激な段階にまで行きつき、自身の悲劇や周囲との軋轢ないし孤立化を起しがちな人物の心理である。それが極端な場合には、あるいは他者に向けての殺意（4 「わが一族の復讐」、8 「ある死」）や自身の破滅（2 「泡沫の間で」）に、あるいは 6 「犬たち」のように「狂気」*τρέλα* に行き着いてしまう（Πρίφτη, 2018 は「犬たち」を含めたニルヴァナス作品を分析し、ここに見られる「狂気」の問題を詳細に論じている）。

このように、島と海の暮らしをセッティングとしながら、その奥にある人間の心理を、距離を置いて冷徹に観察し描出しようとするのが『パルセニス神父伝』の各収録作の主要テーマだと思われる。

そしてこの方向性こそが、実は『ブシヒコの犯罪』にも通底しているように感じる。主人公ニコスの執着する心理も正常には働いておらず、狂気に向かっているとさえいえる。その心理はしかし、外から冷静に見るならば、滑稽で失笑を引きおこすものである。つまり、『ブシヒコの犯罪』はニルヴァナスがほかの短編で描いてきた心理の情景を、ミステリのフォーマットを仮借して長編に拡大させ、アイロニーに満ちたさまを存分に暴きたてることで笑いを引き出すように狙った作品なのではないかと思う。

『プシヒコの犯罪』 引用

<p>① p. 28</p> <p>Έτσι σιγά σιγά τα όρια του φανταστικού και του πραγματικού είχαν συγχυθεί μέσα του, με έναν τρόπο περίεργο, ώστε πολλές στιγμές, να μην μπορεί να ξεχωρίσει, αν ήτανε ο ίδιος σκιά του κινηματογράφου ή ζωντανός άνθρωπος.</p>	<p>こうして想像と現実とのあいだの境界が彼【ニコス】の中で少しずつ奇妙な具合に混ざっていき、自分が映画の影なのか、生きている人間なのか、区別がつかない瞬間がしばしばおとずれた。</p>
<p>② p. 40</p> <p>Το βέβαιο είναι, ότι ο Νίκος Μολοχάνθης δεν κρατούσε ποτέ επάνω του ούτε λάζο, ούτε περίστροφο, ούτε απλό σουγιά ακόμη. Η φαντασία του, όμως, τον είχα σπλίσει τώρα με την «αμφίστομον μάχαιρα» για την οποία μιλούσε η ιατροδικαστική έκθεση.</p>	<p>もちろんニコスは飛び出しナイフも、拳銃も、普通の小刀すら手にしたことはなかったのに、自らの想像力によって今では『諸刃の剣』を持たされてしまった。検視官の報告がこの武器を示唆していたのだ。</p>
<p>③ p. 40</p> <p>Ύστερ' από το τρομερό έγκλημά του, ο Νίκος Μολοχάνθης στάθηκε σαν απολιθωμένος μπροστά στο άψυχο θύμα του. Μέσα στο φως του φεγγαριού, που έλουζε το ωχρό πρόσωπο της κόρης και σαβάνωνε το άψυχο σώμα της, είδε το θύμα του με φρίκη του εαυτού του. Σήκωσε όσες πέτρες βρήκε μπροστά του και άρχισε να τις ρίχνει απάνω στο πτώμα, όχι για να κρύψει τα ίχνη του εγκλήματος του (όπως είχαν υποθέσει οι αστυνομικοί ρεπόρτερς), αλλά για να σβήσει από τα μάτια του τη φριχτή εικόνα.</p>	<p>恐るべき犯罪のあと、ニコスは死んだ犠牲者を前にして石になったように動かずにいた。娘の青白い顔にそそぎ、その体を屍衣のように包む月光の中で、おのれの犠牲者にふるえる目を向けた。目前にある限りの石をもち上げては、死体の上に投げ始めた。犯罪の痕跡を隠すためではなく——警察記者たちはそう推測していたのだが——、おぞましい映像を視界から消すためだった。</p>
<p>④ pp. 40-41</p> <p>Το αποτρόπαιο έγκλημα, που εξακολουθούσε να μένει μυστήριο για όλον τον κόσμο, γι' αυτόν δεν είχε πια κανένα μυστικό. Εξούσε ο ίδιος όλες του τις λεπτομέρειες και τις συμπλήρωνε, καθημερινώς, με τα νέα τρομερά στοιχεία. ο Νίκος Μολοχάνθης δε ζούσε πια παρά μέσα στην ατμόσφαιρα του φανταστικού του εγκλήματος. Τη νύχτα ξυπνούσε από τρομαχτικά όνειρα. Το φάντασμα του ανύπαρκτου θύματός του παρουσιαζόταν μπροστά του, με ανοιχτά στήθη</p>	<p>その忌まわしい犯罪は依然としてすべての人にとり秘密めいていたが、彼【ニコス】にはもはやいささかの謎もなかった。自分であらゆる細部を体験し、日々新しい情報をつけ足していったのだ。今やニコスは架空の犯罪の世界の真ただ中に住んでいた。夜は恐ろしい夢で目が覚めた。存在しない犠牲者の霊が目前に現れ、胸をあらわにして傷を見せつける。たまらず起きあがって服を着ると、</p>

<p>και του 'δειχνε τις πληγές του. Σηκωνότανε βιαστικά, ντωνότανε, έβγαينه έξω και πήγαινε στα διανυκτερεύοντα κέντρα, για να σβήσει μέσα στο οινόπνευμα τις φριχτές οπασίες που τον κυνηγούσαν. Αλλά κι εκεί δεν εύρισκε την ησυχία του. Νόμιζε, ότι όλοι μιλούσαν γι' αυτόν και το έγκλημά του. Κάθε χωροφύλακας, που έβλεπε μπροστά του, νόμιζε, ότι τον παραμονεύει για να τον συλλάβει. Ας τον έπιαναν επιτέλους! Άρχισε να το επιθυμεί τώρα, όχι μόνο για να παίξει τον ένδοξό του ρόλο, που σχεδίαζε, αλλά και γιατί νόμιζε, ότι μόνο με τον τρόπο αυτό θα μπορούσε ν' απαλλαγεί από τους εφιάλτες του.</p>	<p>外に出てナイトクラブに向かい、自分を追ってくる悪夢を酒の力で消し去ろうと努めた。しかしそこでも平穩は得られなかった。目前に現れる憲兵たちがみな、自分を逮捕しようと待ち構えているようにみえる。こうなったら捕まえてみればいい！ 今ではそう願いはじめた。そうすれば計画通り栄光の役が回ってくる。それに悪夢から逃れる手はこれしかない。</p>
--	--

テキスト

- Ανώνυμος (2013) *Ο Σέρλοκ Χολμς σώζων τον κ. Βενιζέλον, Από τα νεώτατα κατορθώματα του Σέρλοκ Χολμς, 1913*, (επιμ.) Σταύρος Πετσόπουλος, Άγρα
- Παύλος, Νιρβάνας (1915) *Το συναζάρι του παπα-Παρθένη κι άλλες νησιώτικες ιστορίες*, Αθήνα, Φέξης, 1915.
- Παύλος, Νιρβάνας (2006) *Το έγκλημα του Ψυχικού*, (επιμ.) Γιάννης Ράγκος, Ίνδικτος.

参考文献

- Γιάκος, Δημήτρης, «Νιρβάνας Παύλος», *Μεγάλη Εγκυκλοπαίδεια της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας* 10. Αθήνα, Χάρη Πάτση, χ.χ., σσ.538-551.
- Δημαράς, Κ. Ο. (1987⁸) *Ιστορία της νεοελληνικής λογοτεχνίας*, Ίκαρος.
- Πρίφτη, Ρομίνη (2018) *Η παρουσία της τρέλας στο έργο του Παύλου Νιρβάνα*. Πανεπιστήμιο Κρήτης Τμήμα Φιλολογίας Π. Μ. Σ. Νεοελληνικής Φιλολογίας, (Διπλωματική εργασία)
- Φιλίππου, Φίλιππος (2018) *Ιστορία της ελληνικής αστυνομικής λογοτεχνίας. Ο Γιάννης Μαρής και οι άλλοι*. Εκδόσεις Πατάκη.
- Φιλίππου, Φίλιππος, *Ο Γιάννης Μαρής, η εποχή του και η αστυνομική λογοτεχνία*
<https://crimefictionclubgr.wordpress.com/opinion-greek-detective-stories/mariss/>